福田恒存全集

江苏工业学院图书馆
藏书章

第四卷

文藝春秋

福田恆存全集　第四巻

昭和六十二年八月二十五日第一刷發行

定價五千五百圓

著者　福田恆存

發行者　西永達夫

發行所　株式會社　文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三ノ二十三
郵便番號一〇二
電話東京(〇三)三二六五一二三一(大代表)

印刷所　精興社
製本所　加藤製本
製函所　加藤製函

©TSUNEARI FUKUDA 1987

萬一、落丁、亂丁の場合はお取替いたします

ISBN 4-16-363380-4　　Printed in Japan

目次

I

私の幸福論　11
誤まれる女性解放論　117
日本家庭論　125
戀愛狂時代　134

II

自由と唯物思想　145
自由と進歩　151
性の意識について　163
戰爭責任といふこと　180

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

自己批判といふこと　188
個人主義からの逃避　201
西歐精神について　214
國家的エゴイズム　224
少數派と多數派　239
好色文學論　247
良識家の特權意識　261
絶對者の役割　275
教育・その現象　287
教育・その本質　297
「宇宙ぼけ」の科學教育論議　311

Ⅲ

日本新劇史概觀　319
藝術と政治　341
文藝批評家失格　356
文壇的な、餘りに文壇的な　362
藝術至上主義について　372
文學以前　383

Ⅳ

きのふけふ　411
寸感　428

私情でも筋を通せ　435
悪黨にバツジはない　438

V

私の國語教室　443

覺書　四　631

福田恆存全集　第四巻

装釘　柴永文夫
題簽　田中眞洲

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

I

私の幸福論

まへがき

女性について、そして女性のために、いままでずいぶん多くの文章が書かれてきました。このうへ新しくつけくはへることは、なにもないくらゐです。私は女性についてなにかを書かうとはおもひません。女性を、とくに男性から差別して、女性だけの問題について論じようとはおもひません。さういふことは、あまり意味があるやうにはおもはれないのです。これから私が書かうとすることは、したがつて、女性についてではありません。私は「男性と女性」といふ問題について語らうとおもふのです。

第二に、私は女性の爲にのみ、なにかお喋りをする氣にはなれない。これもあまり意味がないと思ふからですが、それならむしろ女性自身が書いたはうがいいと考へるからであります。ですから、私の目的は、つまり女性の雜誌に幸福の問題について書く氣になつたのは、ただ女性に向つて、男性のいひたいことを書くといふことだけにすぎないのです。

右のことから出てくる當然の結果として、私の文章は、女性ばかりでなく男性にも讀んでいただきたいとおもひます。男性の幸福は女性にかかつてゐると同時に、女性の幸福もすべて男性の態度にかかつてゐるからであります。

ついでに、もうひとつおことわりしておきたいことがあります。私のいふことは、女性のために、女性について語られた多くの文章とちがつて、女性の讀者であるあなたがたの耳に、かならずしも快くひびかないでせう。なぜなら、私の主張は、女性に責任を要求するものであつて、權利や自由を與へることではないからです。さういふと誤解を招くかもしれませんが、わけは、かういふことです。

なるほど、男女は同權であります。男だけに許されて女には許されないなどといふことがあらうはずはない。これは男女の間柄だけについていへることではなく、同性間についてもおなじことで、ある人に許されて、ある人には許されない、そんなことがあつてよいはずのものではありません。人間は平等です。だが、現實ではさうはいかない。現實の世界では、人間は不平等です。惡いといはうが、いけないといはうが、それは事實なのです。

いづれ、さういふことを詳しく書いていくつもりですが、とにかく、それが現實の世界だとすれば、みなさんはどういふふうに生きていつたらいいか。いはゆる女性の權利とか、女性の自由とか、さういふことをいくら聽かされても、短い生涯で、ひとりの力で、この現實を變へてしまふことができない以上、おそらくどうにもなるものではありますまい。

與へられた現實を眼をつぶつて受け容れろといふつもりはありませんが、それだからといつて、ただ現實がまちがつてゐるといふやうなことばかりいつてゐてもはじまらない。現實がどうであらうと、みなさんは、この世に生れた以上、幸福にならねばならぬ責任があるのです、幸福になる權利よりも、幸福になる責任について、私は語りたいとおもひます。

私はやさしく書くつもりですが、幸福になる道のむづかしさについて語るつもりです。女性が經濟的に獨立すればいいとか、家庭制度を破壞すればいいとか、臺所を能率的に改良すればいいとか、その種のやさしいことを、私から期待しては困ります。そんな風に生活の外側をいくら改造しても、女性は、人間は、幸福になれるものではありません。幸福といふものは、もつとむづかしいことです。それは、たつた一人の孤獨なたたかひであります。それは大變困難な道ではありますが、しかし、私は無責任なことをいひださうとしてゐるのではない。私は自分のことばに責任をもちます。私のいふとほりの生き方をすれば、かならず幸福になれる——少ゝ神がかつてまゐりましたが、すくなくとも、幸福への入口だけは發見できるでせう。

いくぶん、氣にいらぬことがあつても、最後まで辛抱して讀んでいただきたいとおもひます。すくなくとも、いままで、女性のために、女性について語られた文章が、あまり觸れなかつたことを書いていくつもりです。書く側も、讀む側も、なるべく觸れたがらない問題といふものが、世のなかには案外たくさんあるものです。ことに男女の問題には、それが多い。そして、眞實はたいていさういふもののうちにひそんでゐるのです。

一　美醜について

美醜も、男女の幸福について論じるとき、ひとびとがあまり觸れたがらない――正確にいへば、よく知つてゐるのに觸れたがらない――根本的な問題のひとつです。

身上相談などでよく見かけることですが、たとへば、男にだまされて棄てられたとか、夫が浮氣をしてしやうがないとか、さういふ訴へを讀むたびに、私はいつも一種のもどかしさを感じます。そのもどかしさといふのは、一口にいへば、惱みを訴へるひとの顏が見たいといふことであります。顏を見なければ、とても答へられないといふ氣がするのです。さういふとみなさんのうちには、ずいぶん殘酷なことをいふやつだと抗議するかたがゐるかもしれません。顏が醜ければ、夫に浮氣されてもしかたがない、男に棄てられてもしかたはない、さういふつもりなのかとおつしやるでせう。もちろん、それで男性側の非が、許されるわけのものではありませんが、さうかといつて、醜く生れついた女性に生涯つきまとふ不幸といふ現實を無視するわけにはいかないのです。いくら殘酷でも、それは動かしがたい現實なのであります。いや、現實といふものは、つねにさうした殘酷なものなのであります。機會均等とか、人間は平等であるとか、その種の空念佛をいくら唱へても、この一片の殘酷な現實を動かすことはできないのです。

しかし、身上相談係といふものは、つねに人間平等、機會均等の立場からしか答へてくれません。つまり、女性といふ女性が、みんな同じ魅力をもつて生れついてゐるといふ假定のもとに答へるのです。私のやうに意地わるく顏が見たいなどとは申しません。

ここで、私は以前よんだある女流隨筆家の文章を想ひだしました。そのひとはどこかの盛り場を散歩してゐた。すると、うしろから足早に歩いてきた若い男が、追ひこしざま、ちらつとそのひとの顏をのぞいたといふのです。「かういふことは、路上でも、電車のなかでも、なにかの會合でも、つねに經驗することだが」とその女流隨筆家は書いてをりました。「その瞬間、私は、若い男の面上に、輕い失望と輕蔑の色が浮ぶのを認めた」と。

この女性は私も知つてゐるひとですが、御自分がさうおもひこんでゐるほど醜い顏の持主ではない。その顏はむしろある種の魅力をもつてゐます。眞相は、おそらく、かういふことだつたのでせう。つまり、そのひとのうしろ姿が、すでに魅力のある顏にくらべても、あまりによすぎたのであらうとおもひます。

それはともかく、うしろ姿を見て、それを追ひこして顏をのぞきたいといふ心理は、私が身上相談を讀んで、質問者の顏を見たいといつた氣もちと、だいたい同じやうなも

のであります。この女流隨筆家は、さういふ男性の態度を憎むと書いてをります。ただ顔をのぞきこむだけでなく、その瞬間、じつに遠慮會釋もなく、「なあんだ！」といふ輕蔑の色を浮べ、その女性を、ただちに自分とは生涯かかはりのない女の部類に投げこんでしまふ男のつめたさは、いくら憎んでも憎みたりないといつてをります。なるほど、私にも、この女性の怒りは理解できます。このばあひは路上だから、いくら美人でも、それなりに終つたことでせうが、たとへば汽車のなかだつたら、男の視線は、美しいとおもつた顔には何度も執拗にからんでいくでせうが、「自分とは生涯かかはりのない女の部類」に入れてしまつた顔には、二度とふたたびもどつていかないでせう。

だが、それはどうにもしやうがないことなのです。男を憎んでもはじまらぬことなのです。人間は他の動物とちがつて高級なのだから、さういふ美醜にわづらはされないで、人格の値打そのものを見ぬくべきだ。もし心ひかれるなら、さういふ人格の本質にだけ、心ひかれるべきだ。さういひたいところだが、それこそ無理な註文といふべきでせう。

女性の雜誌を讀むと、この種の無理な註文が隨所に感じられます。もちろん、直接にさういふことはいはないかもしれません。しかし、たとへば、女が結婚して幸福になるためには、經濟力、智力、いづれの面においても、相手の男と同等の力を維持していかねばならないといふことがよく書かれてをります。原理はさうかもしれませんが、事實上は、さういふ獨立した女性が、かへつて不幸になつてゐることのはうが多いやうです。智力があつても、醜さのゆゑに男の心をつなぎとめえぬ女があり、智力があつて、しかも男の心をつなぎとめてゐる女があるとしても、さういふばあひでも、理由は、その智力にはなく、じつは、その美しさにほかならないのです。さういふものではないでせうか。もつとはつきりいへば、經濟力、智力の向上による女性解放を說く當の男性自身が實生活では、けつきよく女の美しさに心ひかれ、自說を裏切つてゐるのが通例なのではありますまいか。

ところで、かういふふうに裁かれてゐるのは、女だけではありません。男も同樣に裁かれてをります。いくら殘酷といはうが、なんといはうが、男と女とがはじめて出あふとき、電車のなかであらうが、路上であらうが、たがひに見あつた瞬間、それぞれに相手を裁いてゐるのです。眼と眼を見かはしたとき、それがいはば「勝負あつた」瞬間なのであります。若いひとたちのあひだでは、見合結婚はどうのかうのといふ議論が相變らずおこなはれてゐるやうですが、嚴密にいへば、一步そとに出た男女は、始終見合をやつてゐるやうなものであります。しかも、この街頭における不意の見合は、いはゆる準備された見合よりも、ずつと純粹です。おたがひに素姓も知らず、財產も學歷も知ら

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com